

『東方』三二〇号より

敦煌学の新展開

池田 温

(東京大学名誉教授・創価大学特任教授)

一九九八年六月、北京の中国社会科学院に敦煌学研究中心が生れ、社会科学院の歴史・文学・言語・宗教・民族・経済等諸分野に属す、十余名の敦煌学に関係する研究者が一個の学際的組織を立上げた。本書はこの組織が同年九月二一日に正式に開始した最初の総合研究テーマの報告書である。内容は人文・社会・自然科学に亘り、古稀をこえる老大家から働きざかりの四十・五十代メンバーと三十代の若手を含む老・中・青の結合により研究が推進された。張弓氏執筆の五頁の前言には、敦煌典籍とは経史子集四部の書籍をいい、それらの歴史的、文化的価値の闡明、中原と西陲の一体性を追求し、印刷普及以前の写本の最大堆積を系統的に分析して、図書学の見地で整理を進め、多面的に写本の内容・形式を解明し、当代社会の実相に迫り、文化の実体を把握せんとする趣旨が述べられる。本書の構成は、

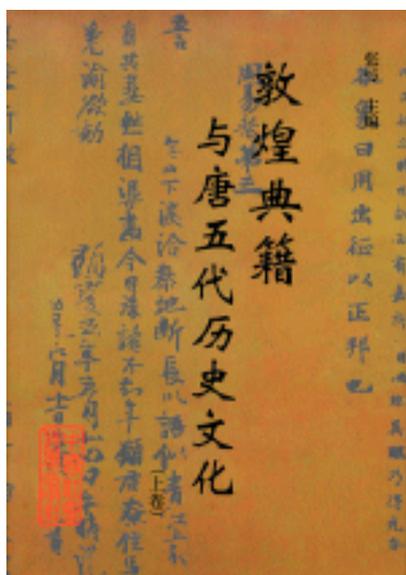
- 張弓(一九三八―)(社科院歴史所) 緒論 三四頁／〇点 (図版)
 - 王素(故宫博物院) 儒典 六六頁／五点
 - 牛来穎(社科院歴史所) 蒙書 四八頁／五点
 - 方広鎔(一九四八―)(社科院宗教所) 佛典一二四頁／五点
 - 王卡(一九五六―)(社科院宗教所) 道典 七〇頁／四点
 - 李錦繡(社科院歴史所) 史地 二〇一頁／七点
- 以上上巻

[トップページにもどる](#)

張弓主編

『敦煌典籍与唐五代歴史文化』(上・下)

中国社会科学出版社・二〇〇六年・五、八二七頁



張錫厚(一九三七―)(社科院文学所)

文学一〇四節

七九頁／四点 (図版)

楊宝玉(社科院歴史所)

文学五〇一〇節

七八頁／五点

吳麗娛(社科院歴史所) 書儀

黃正建(一九五四―)(社科院歴史所) 雜占

一四二頁／三点

王咪咪(医科学院中医医史研) 医藥

鄧文寬(一九四九―)(文物局文物研)

天文曆法算学印刷品

王堯(中央民族大学) 藏文

六五頁／三点
五七頁／一点
以上下巻

以上十三名により十三に分類された典籍が解説される。時代は魏晉く五代北宋初、緒論によると経部儒典が二、三

十種二六一巻、史部は六、七十種、子部は七、八十種、集部が三、四十種、四部合計約二百種ばかり。敦煌文献の主体佛典は一千種を下らず、そのうち三百種近くが大蔵経著録。道典は数百種、道藏著録未著録約半々という。

以上で明らかのように、敦煌文献の大半を占める典籍(書籍)が本書の対象で、文書類(寺院文書・官文書・書翰等)は除外されている。恐らく別に専書が作られるのであろう。次に本書の最大の特徴は、全典籍を包含しながら、分野間に著しい詳略の差がめだつことである。点数からみると全典籍の九割を占める佛典の記述が僅か一割に凝縮され、数十点乃至二、三百点の史地・書儀・雑占が夫々一割以上のスペースを与えられている。比較的若い世代に属する李錦繡・呉麗娛・黄正建氏らが比較的詳細に叙述しており、当代史の特質や年代的推移と典籍内容の関連が語られている。文学研究所や宗教研究所ではなく、歴史研究所が本書編纂の主体をなしたとみて大過なからう。されば本書の最大の受益者は歴史家と思われる。主編張弓氏は一九五七年秋北京師範大学歴史系に入り白寿彝教授らの薫陶により科学的歴史観(唯物史観)を身につけ六一年卒業、歴史教師を十数年勤め四十歳をすぎたから武漢大の唐長孺教授の隋唐史研究生となった。一年間に『隋書』『新唐書』『旧唐書』『資治通鑑隋唐五代紀』を通読するよう指導された。さらに『全唐文』を一覧して重要資料のメモをとったというからその勉強ぶりが偲ばれる。その修士論文『唐朝倉廩制度初探』は(中華歴史叢書)の一冊として一九八六年中華書局から出版された。北京の中国社会科学院歴史研究所のスタッフとなり唐史学会員となった彼は最近の研究課題として(唐代寺院と寺院経済)をあげている(中国唐史学会会刊五期)、八六年三月)。約一〇年の苦心博搜の成果は

▶ トップページにもどる

大著『漢唐佛寺文化史』上下二巻(唐研究基金会叢書)、中国社会科学出版社、一九九七年二月、一〇四四頁)に結実した。本書の篇目は以下のとおり。

自序 漢唐佛寺——華梵文明的遇合与化新	一四頁
尋藍篇 漢晋、南北朝、隋唐、佛寺型制的演變	一六二頁
造設篇 營造、宮寺發願、寺等、景觀	九一頁
基壤篇 早期、東晋、隋、初唐盛唐、中唐晚唐	五二頁
僧伽篇 僧尼儀制、僧官与寺職、省寺的僧伽管理	六五頁
科門篇 訳場、義林、禪窟、律鎮、声苑	九二頁
妙相篇(上) 寺院絵画造像区群	六〇頁
妙相篇(下) 石窟寺絵画造像区群、芸術風格与審美趣味、瑞像崇拜	一五〇頁
文苑篇 人文撰述、文学創作	一六〇頁
芸技篇 楽舞、戲弄、書法、茶道、医薬・曆算	八四頁
輔世篇 歳節、寺学、外藏(附舍利藏)、栖寄、利養	一一〇頁

『漢唐佛寺文化史』は簡体字使用、巻頭に(唐代佛寺分布示意图・唐代佛寺区群示意图)折込地図、黑白五件・カラー一二件の図版を掲げ、下巻首に黑白三・カラー一九件の図版を附し、なお本文中に一八〇余件の図を挿入し、読者の便をはかり、每篇目末に注釈を附し記事の出処と参照文献、注意事項等を述べている。入蔵文献は大正蔵經によって頁が表示され、台北・中央研究院歴史語言研究所の(二十四史電腦検索系統)にも言及される。本書は六千部印刷、広汎な普及が察せられ、学界・教育界への影響もはかりしれない。本書撰述を通じ中国佛教全般に見通しをもち一定の見識を具えた編者張弓氏を中心に国家社会科学助成項目に

採用された〈敦煌典籍与唐五代歴史文化〉の総合研究が推進され、二〇〇一〜二〇〇二年に原稿ができ〇三年に完結した。出版までの三年間の新知見の一部は取入れたが、不十分を免れぬと編者はのべる。はじめ予定した言語典籍篇は執筆者が研究グループを去ったので実現しなかった。かように細部に缺陷を含むとはいえ、『敦煌典籍与唐五代歴史文化』は敦煌学の現状をものがたり主要成果を集約した極めて有用な参考書といえよう。日本の研究成果もひろく参照されているが、欧文の参照にやや難が感ぜられる。巻末一七四頁脚注に、

Charles → Charles
Tibétain → Tibétain (二三所)
Asiatique → Asiatique
ed → et
textes → textes
après → après
annotée → annotée
Touen-bouang → Touen-houang
Edition → Edition
vn → un
de Jong → de Jong (二三所)
Etudes → Etudes
maroccelle Lalou → Marcel Lalou

の如く一〇行に十数カ所の誤植が目につく。巻頭のカラー図版八頁一五件、黒白図版一六頁三三件は小型ながら敦煌典籍の面目をよく伝え、全書の脚注を通じ執筆者達の参照した資料、研究文献を窺い得る。但だ欲を言えば、まったくBibliographyと索引が収載されていたなら本書の利用価値ははるかに高まったであろうと惜しまれる。

[トップページにもどる](#)